

第4回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【佳作】

「^{まめ}豆まき」 東京都 ^{ひらの ゆきこ}平野 由希子

^{そふ}祖父は ^{むかし}昔からの ^{なら}習わしを大切に ^{ひとまか}する人だった。季節の行事なども ^{ぜんぶ}人任せにせず全部自分でやっていた。正月の ^{まつかざり}松飾や ^{こしょうがつ}小正月に ^{かざ}飾る ^{もちばな}餅花や ^{だんご}団子も自分で用意し飾りつけをしていた。

^{せつぶん}節分の ^{まめ}豆まきも、^{みずか}自ら ^{そっせん}率先してやっていた。

夜、祖父の家に行くとき、すでに ^{あめだま}飴玉や ^{こんべいとう}金平糖や ^{らっかせい}落花生などが入ったザルが用意されていて、祖父がその前に ^{すわ}座っている。みんなが集まるのを見計らって祖父が立ち上がり、お菓子の入ったザルを持って ^{ざしき}座敷に行く。みんながそのあとからゾロゾロついて行く。

お菓子を ^{つか}わし掴みにしながら、祖父が、「^{おに}鬼は外。^{そと}福は内。^{ふく}福は内。」と言いながらお菓子をまくと、みんながワッとばかりに飛びつく。座敷に ^{におうだ}仁王立ちになり、ぶっきらぼうな ^{くちょう}口調で、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまく祖父の姿は、なかなか ^{いげん}威厳のあるものだった。

子どもだけでなく、^{おとな}大人も ^{いっしょ}一緒にお菓子を ^{ひろ}拾うのだが、わたしの母などは ^{まえか}前掛けを広げ、子どもたちを ^お押し退けるようにしながら拾い集めていたものだった。

当時、私の ^{むら}村ではどこの家でもこのようなことをそれぞれの家でやっていた。祖父も子どもたちを ^{よろこ}喜ばしてあげたいという気持ちも少しはあったかもしれないが、昔からの ^{なら}習わしを ^{かちょう}家長の ^{つと}務めとしてやっていただけであったのかもしれない。

祖父は私が十一歳のとき ^な亡くなった。 ^{きむずか}気難しい人で子どもには ^{ちかよ}近寄りたがるところがあったが、^{いがい}意外に自分の中で ^{そんざい}大きな存在であったことを知ったのは、自分も子の親となり、

昔のことを思い出すようになってからだった。

自分の子ども時代を思い出すたび、その中心にいつも祖父がいたことを思うとき、その存在の大きさに改めて思いをいたすのである。

祖父に倣い、自分も昔の習わしを子どもたちに伝えようと思い、節分の日にお菓子やキャラメルなどを用意し、「鬼は外。福は内」と豆まきをやるようになった。最初、キャッキャッと言いながら喜んでいた子どもたちも、だんだん年齢が上がるにつれて親の思いつきに付き合ってくれている様子がみてとれたので、お菓子と一緒に十円玉や百円玉を紙に包んでまくと、俄然、顔つきが変わり、上の娘などは十円玉には目もくれず百円玉に狙いを定め、必死の形相で拾い集めていた。さらに五百円玉を数枚加えようと、夫も参加し、腹ばいになり、子どもたちを押しよけるようにしながら両手を広げ、手当たり次第にかき集めていた。

下の息子はまだ小さかったので、楽しそうにお菓子を拾っていたが、その息子が小学校高学年になり、「来年からもうやらなくてもいいよ」と宣言したので、我が家の年中行事も自然消滅のような形で終わりを告げた。

祖父が亡くなってからすでに半世紀が過ぎた。歳月とともに記憶は日々色褪せていくが、座敷に仁王立ちになり、ぶっきらぼうな口調で、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまいていた祖父の姿は、いまでも鮮明に心に焼きついている。